

令和8年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第2号
(5月の発生予想)

令和8年4月30日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】

黒斑病	量：やや少ない 時期：並	① 前年の発生量(葉)は平年比やや少なく、越冬菌量は平年比やや少ないと推測される。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
黒星病	量：やや少ない 時期：並	① 前年の発生量(葉)は平年比やや少なく、越冬菌量も平年比やや少ないと推測される。(－) ② 4月下旬の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±～－)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 花(果)そう葉の基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第除去し、園外に持ち出して適切に処分する。</p> <p>② 4月下旬～5月下旬は重点防除時期のため、この時期の防除を徹底する。園地周縁部等の薬剤のかかりにくい部分に対しては補正散布を行う。</p> <p>③ 耐性菌の出現を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用を避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>		
セイヨウナシ 褐色斑点病	量：やや多い 時期：並～やや早い	① 前年の発生量(葉)は平年比多く、越冬菌量も平年比多いと推測される。(＋) ② 一部園地では、4月下旬に発病葉が確認された。(＋) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 園内をよく観察し、発病葉が認められた場合は速やかに除去し、園外に持ち出して適切に処分する。</p> <p>② 開花初期～大袋かけ前は重点防除時期のため、この時期の防除を徹底する。園地周縁部等の薬剤のかかりにくい部分に対しては補正散布を行う。</p> <p>③ 耐性菌の出現を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用を避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】 つづき

ナシヒメシンクイ	量：多い 時期：並～やや早い	① フェロモントラップの前年の総誘殺数は平年並～平年比多い。（＋） ② 越冬世代（成虫）の誘殺数は平年比多い。（＋） ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① フェロモントラップの越冬世代成虫の誘殺盛期は4月第4半旬と推測される。第1世代幼虫の防除時期は、越冬世代成虫誘殺ピークから12～22日後である。</p> <p>② 防除が遅れないよう留意するとともに近接するもも樹等の防除も徹底する。</p>		
ハマキムシ類	量：多い 時期：並	① 主要種であるリンゴコカクモンハマキは、フェロモントラップの前年の総誘殺数が平年比多く、越冬世代の発生量も多いと推測される。（＋） ② 4月下旬の被害葉の発生量は平年比多い。（＋） ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 園内をよく観察し、花（果）そう葉に被害がみられた園地では越冬幼虫を対象に5月上旬までに防除を行う。</p> <p>② 第1世代幼虫の防除時期は、越冬世代成虫誘殺盛期の概ね20日後である。今後の気象経過により越冬世代成虫の発生時期が早まる可能性があるため、フェロモントラップの誘殺状況に留意する。</p>		
アブラムシ類	量：並 時期：並	① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬虫の発生量も平年比やや少ないと推測される。（－） ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を行う。</p>		
クワコナカイガラムシ	量：並 時期：やや早い	① 前年の発生量（果実）は平年並。（±） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 4月の日平均気温から推測される越冬世代幼虫のふ化時期は、5月第1～2半旬であり、平年より3日程度早い。</p> <p>② 若齢期ほど防除効果が高いので、防除時期が遅れないよう注意する。</p>		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】 つづき

<p>ニセナシサビダニ</p>	<p>量：やや多い 時期：並</p>	<p>① 前年の発生量（果実）は平年比やや多く、越冬虫の発生量もやや多いと推測される。（+） ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 4月下旬～5月上旬が重点防除時期にあたるので、前年にモザイク症葉の発生がみられた園地では、必ず防除を行う。</p> <p>② 本種は日本なしだけでなく、ル レクチエにも寄生するので、前年にモザイク症葉の発生がみられた園地では、日本なしと同様の防除対応を行う。</p>		

【もも】

<p>せん孔細菌病</p>	<p>量：並 時期：並</p>	<p>① 前年秋季の発生量（葉）は平年比少なく、越冬菌量も少ないと推測される。（-） ② 春型枝病斑が複数園地で確認されている。（+） ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 春型枝病斑は、新梢葉や果実への伝染源となるため、ほ場内をよく観察し、疑わしい枝も含め徹底してせん除する。また、せん除した枝病斑は、園外に持ち出し適切に処分する。</p> <p>② 病原菌は葉や果実の自然開口部（気孔等）や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を徹底する。</p> <p>③ 薬剤防除は多発生してからでは効果が劣るため、早めの予防散布を心がける。重点防除時期は4月中旬～6月中旬である。</p>		
<p>モモハモグリガ</p>	<p>量：やや少ない</p>	<p>① 前年のフェロモントラップの総誘殺数は平年比少ない。（-） ② 4月24日現在、フェロモントラップの越冬世代成虫の誘殺は未確認。（-） ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（+）</p>

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【かき】

<p>円星落葉病</p>	<p>量：並 時期：やや早い</p>	<p>① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬菌量はやや少ないと推測される。（－） ② 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並みと予想されている。（＋）</p>
<p>【防除上の留意点】 ① 発病は10月上旬頃であるが、主要な感染期は5月上旬～7月上旬であるため、重点防除期間として、防除を実施する。 ② 前年罹病した落葉が主な伝染源となるため、前年発生したほ場では落葉処理を徹底する。</p>		
<p>ハマキムシ類</p>	<p>量：並 時期：並</p>	<p>① 前年の発生量は平年比やや少なく、フェロモントラップの総誘殺数は平年比やや少ない～やや多かった。（－～±） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）</p>
<p>ゾコカゲラムシ</p>	<p>量：並 時期：やや早い</p>	<p>① 前年の発生量は近年比少なく、フェロモントラップの誘殺数は近年比少ない～並（－） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）</p>
<p>【防除上の留意点】 成虫や卵には薬剤散布効果が劣り、若齢幼虫ほど防除効果が高いため、防除時期が遅れないようフェロモントラップの誘殺状況等に留意する。</p>		

【冬春トマト（施設）】

<p>灰色かび病</p>	<p>量：やや少ない 程度：少発生 （果実発病度1～20）</p>	<p>① 4月下旬の果実発病は少発生で平年比やや少ない。（－） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（－）</p>
<p>コナジラミ類</p>	<p>量：並 程度：少発生 （寄生株率1～25%）</p>	<p>① 4月下旬の発生量は未確認で近年比やや少ない。（－） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）</p>
<p>アザミウマ類</p>	<p>量：並 程度：少発生 （寄生花率1～10%）</p>	<p>① 4月下旬の花への寄生や被害果（白ぶくれ症果）は未確認で平年並。（±） ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。（＋）</p>

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【冬春いちご（施設）】

うどんこ病	量：並 程度：少発生 (発病果率1～5%)	① 4月下旬の果実発病は未確認で平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
灰色かび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病果率1～5%)	① 4月下旬の果実発病は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(－)
アブラムシ類	量：並 程度：少発生 (寄生株率1～25%)	① 4月下旬の寄生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
コナジラミ類	量：並 程度：少発生 (寄生葉率1～25%)	① 4月下旬の寄生は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
アザミウマ類	量：並 程度：少発生 (寄生花率1～2%、 被害果率1～5%)	① 4月下旬の被害果は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
ハダニ類	量：多 程度：少発生 (1葉当たり 寄生虫数1～2、 寄生株率1～40%)	① 4月下旬の寄生は平年比やや多い。(＋) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2：「予報の根拠」の、（+）は発生量を増加させる要因、（-）は発生量を減少させる要因、（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使いましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

【参考】北陸地方 1か月予報（5月2日から6月1日までの天候見通し）

（新潟地方气象台：令和8年4月30日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

2週目は、高い確率50%です。

3～4週目は、高い確率50%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	40	50
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	30	40

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（5月 2日～5月 8日）	20	40	40
2週目（5月 9日～5月15日）	20	30	50
3～4週目（5月16日～5月29日）	20	30	50